

國學院大學学術情報リポジトリ

中世的な勸農祭祀の成立と社会背景：
祈年穀奉幣の実態を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 菜摘美, Matsumoto, Natsumi メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2515

論 文 要 旨

学籍番号	203105	氏 名	松本 菜摘美
論文題目： 中世的な勸農祭祀の成立と社会背景—祈年穀奉幣の実態を中心に—			
(内容の要旨) 10 世紀頃から盛んに行なわれた畿内周辺を対象とした奉幣は、十六社奉幣に始まり 22 社を対象とした二十二社奉幣へと発展した。その中の一つである祈年穀奉幣は、その年の豊穰を祈願する奉幣であったことから、祈年祭に代わる国家的勸農祭祀として重要視されるようになった。 祈年穀奉幣は成立に関する研究は多く行なわれているが、その実態に関する研究はあまり見られない。本論では祈年穀奉幣の祭儀実態について、『江家次第』や『西宮記』、『北山抄』を用いて、祈年穀奉幣と臨時奉幣、伊勢例幣の祭儀次第を図化し、全体の位置関係を総合的に把握した上で、詳細に比較検討した。その中で、行幸がない時の祭儀はどの奉幣でも同様な形で行なわれており、奉幣の祭儀の形式は 10 世紀後半には確立していたことを確認した。また、祈年穀奉幣の祭儀次第の中で天皇の関与が確認できる部分に注目し、その作法の性格を検討することで、国家祭祀という大きな枠組みのなかに伊勢神宮と諸社が並列して存在するような構造であった可能性を提示した。 祈年穀奉幣の特徴の一つは恒例化した点であるが、その時期についての研究はあまり行なわれていない。そこで恒例化の時期について、実際に恒例化が行なわれていたかの有無を含め検討を行なった。伊勢例幣と祈年穀奉幣の祭儀次第を確認すると、伊勢例幣は常に同様な宣命であったため宣命草の奏上を行なわなかったのに対し、祈年穀奉幣は念入りに行なっていたことに注目し、祈年穀奉幣は恒例化の認識がなかった可能性を指摘した。このことから、恒例化について再検討の必要性を提示した。 祈年穀奉幣が展開する背景については、承平・天慶の乱などの社会混乱の影響が強いと考えられているが、近年の研究では祈年穀奉幣は豊穰祈願の奉幣であることから、農業へ影響を与える気候変動との関連性が考えられている。祈年穀奉幣の展開と気候変動との関連について、『大日本史料』を用い、祈年穀奉幣が開催された時期や回数の確認を行なった。そこから、祈年穀奉幣は 10 世紀前半に「二十二社奉幣」の一つとして成立し、10 世紀後半から 11 世紀前半には「予防」の祭祀という性格から「二十二社奉幣」から機能的に分化し、11 世紀後半になると定例化・定型化したという 3 段階で展開していたことを確認した。この展開には「予防」という機能が重要であったことから、気候変動や気象災害との関連について更なる検討の必要性を確認した。			
キーワード (5 語)			
祈年穀奉幣、二十二社、勸農祭祀、気候変動、天皇祭祀			